



No Side(ノーサイド)の精神

校長 末松 隆一郎

街のそこかしこで秋桜の花が優しく風に揺れ、彼岸花の赤鮮やかに、芽蝸(ひぐらし)もなかなかと去り行く頃となりました。「倉田小運動会」を3週間後に控え、学校中から子ども達の元気な声が絶え間なく響いています。

春先のWBCや夏のバスケットボールワールドカップの余韻が残る中、ラグビーワールドカップフランス大会、バレーボール五輪予選ワールドカップ、アジア競技大会杭州2023が開幕し、国内外、倉田小を含め「スポーツの秋」真っ盛り。応援にも力が入る日々が続きます。

「ここでノーサイド！」ラグビーの中継を見ていると、試合終了の時、この言葉を耳にします。野球やサッカーなどの他のスポーツでは、「試合終了」「ゲームセット」「ゲームオーバー」「タイムアップ」等々、「勝敗が決まった」「試合時間が終わった」という意味の言葉が使われますが、なぜラグビーでは、「ノーサイド」というのでしょうか。

この言葉は、試合が終わった瞬間、「試合が終われば、勝った側(Side)も負けた側(Side)もない(No)」という意味になります。私は、この言葉の精神が好きで、「ノーサイドの精神。それは互いの体を潰し合うほどの激しいスポーツならでは、また、どのスポーツや勝負にも通じる良い言葉だなあ。」と自分なりに解釈をしていました。ところが調べてみると、この言葉を使っているのは、現在日本だけだそうです。ラグビーの本場イングランドでも、1970年代位までは使われていたそうですが、今は世界的にはラグビーでの試合終了は「Full Time」が一般的だそうです。日本以外では、「ノーサイド」はもはや死語になっているとのこと。



では、どうして日本だけこの言葉が今なお残っているのでしょうか。松任谷由実さんの「ノーサイド」がヒットしたからや「ノーサイドゲーム」というドラマが放送されたから等々諸説あるようですが、私はこのように思います。それは、「礼に始まり礼に終わる」、脈々と受け継がれてきた美しい伝統と礼法、そして、「敗者への敬意」という武士道に通じる精神が、この国のスポーツマンシップの根底にあるからではないかと。今回のラグビーワールドカップでも日本代表選手として活躍しているリーチ・マイケル選手は、次のように言っています。

「全力で戦った相手には敬意を示す。それが敗者であっても、その名誉は必ず守る。」



運動会、それはスポーツの祭典である以上、必ず勝ち負けがあります。赤組・白組に分かれ、子ども達一人一人、代表リレー選手、応援団・・・、チームの勝利を目指して一生懸命練習に励んでいます。当日の結果発表、喜びに歓喜する子、悔し涙を流す子、それは非情な結果とも言えますが、同時に、「全力で頑張ってきた、戦った」証でもあります。

団体演技では、楽しく笑顔で、そして魂の演技でベストパフォーマンスを発揮し、全力で戦った相手チームには敬意を示し、互いの名誉を守り合う、そんな「No Side」の精神に溢れた「倉田小運動会」であってほしいと思います。